

## 急性期に冠動脈病変（一過性拡大を含めて）を認めなかった川崎病患児の長期観察所見

新村 一郎，柴田 利満，真下 和宏

要約：急性期に冠動脈病変を認めなかった川崎病患児104例の長期観察所見では新たな心血管障害の発生は見られなかった。従って急性期に精度の高い循環器検査が施行されている症例に関しては急性期に問題がなければ，長期間にわたる定期的な経過観察は必要ないと考えられた。

見出し語：急性期に心血管障害を認めない川崎病，長期経過観察

急性期に冠動脈病変を呈しなかった川崎病患児をいつまで経過観察すべきであるかについては未だ一定の見解は得られていない。そこで，私たちの病院及び小児循環器医師のいる関連病院において急性期より観察を続けている急性期に冠動脈病変を認めなかった川崎病患児の長期観察所見について検討した。

対象：川崎病急性期に心エコー図検査で一過性冠動脈拡大を含む冠動脈の病変を認めず，心電図で虚血性変化や不整脈を認めず，血液化学検査で心筋逸脱酵素の上昇をみなかった104症例（男子59，女子45）で発症時年齢では0歳が19例（M：9，F：10），1歳17例（M：9，F：8），2歳

24例（M：14，F：10），3歳22例（M：11，F：11），4歳7例（M：5，F：2），5歳以上15例（M：11，F：4）を対象とした。選択的冠動脈造影は15例（14.4%）に施行された。

経過観察期間は8年より15年までを今回の対象とした。その内訳では8年間で31例，9年間24例，10年間16例，11年間13例，12年間9例，13年間以上11例である。

外来での経過観察時の検査は安静時及び運動負荷心電図，心エコー図検査，血液化学検査であり，発症5年以降は2～3年に1回の受診を原則としている。

成績：安静時及び運動負荷心電図で新たな虚血性

横浜市大小児科

ST・T変化や complex PVC, 臨床上有意義な徐拍不整脈などの不整脈の出現はなく, 健康時と同様の運動能を示した。心エコー図検査においても新たな冠動脈の拡大や狭窄を呈した症例はなく, 左室収縮能においても問題はなかった。ただし, 経過中に心臓の核医学的検査や冠動脈選択的造影, 体表面マッピングなどの検査は施行していない。川崎病の急性期に循環器専門医が問題なしと判断した症例に遠隔期に虚血性病変や心筋障害が新たに検出された症例は経験されていない。従って, 今回対象の川崎病患児の観察期間は3~5年間で十分である。その後は節目節目(小学校入学時, 小学5~6年または中学校入学時, 高校入学時, 大学入学時など)に循環器検査(安静時及び運動負荷心電図, 心エコー図検査など)を行なえば良いと考えられた。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:急性期に冠動脈病変を認めなかった川崎病患儿 104 例の長期観察所見では新たな心血管障害の発生は見られなかった。従って急性期に精度の高い循環器検査が施行されている症例に関しては急性期に問題がなければ、長期間にわたる定期的な経過観察は必要ないと考えられた。